

Contents

02 目次
プロローグ Vol. 30

04 **特集 金融**
みんなのお金
一回す仕組みを作る

個人や家庭にお金を回す
10 金融サービスへのアクセスが人々に生きる力を与える

企業にお金を回す
14 企業を元気にする三つの方法

安定した金融政策を行う
18 金融のかじ取り役 国のお金を動かす中央銀行

進む途上国への投資
20 民間と連携した協力のかたち

24 **JICA海外協力隊がゆく Vol. 29**
ボツワナ

26 **世界につながる教室⑮**
研修から授業実践へ

28 **地球ギャラリー Vol.150 カンボジア王国**
写真・文●石川正頼(ニュースフォトグラファー)
スポーツが映しだす時代

34 **教えて！ 外務省**
知っておきたい国際協力③①

36 JICAイベントカレンダー

38 読者の声、プレゼントほか

39 JICA PRESS

40 **わたしが見つけたSDGs Vol.31**

* 掲載されている情報等は取材当時のものです。



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust



お金はモノやサービスの売り買いにとっても便利なもの。しかし、途上国では人々にお金が届きにくい状況も多い。JICAは社会の隅々にまでお金が回るような金融の仕組み作りを進めている。
Catchlight Lens/Shutterstock.com

次世代の 笑顔のために 事業を創出

文・洪澤健

カメラを向けると、子どもたちがケラケラと笑顔を返してくれました。

コロナ禍前の2019年の秋。日本経済新聞社が主催する東アフリカ・ツアアの終盤で印象に残っている一コマです。笑顔は、どの国でも通じる共通言語であると感じました。

身体の邪気を洗い流してくれるウガンダの大自然も体験しました。ただ、都市部に入ると身動きが取れない渋滞にはまり、排気ガスで息が詰まります。渋滞から解消されても舗装されていない道路が多く、乗車席から腰が宙に浮くほど揺すられ、身心から力が振り落とされるほどでした。

アフリカでは、人口が都市部に集中する深刻な社会的問題を抱えています。

ただ、ウガンダの首都カンパラ市内のインキュベーション・センター^{*1}を視察すると先進国と変わらない空間があります。女性も数多く、若手ウガンダ人がラップトップPCの画面をにらみながらカタカタと手を動かして、それぞれのスタートアップ事業の展開に挑んでいました。

エチオピアとウガンダで参加したスタートアップ起業家のピッチイベント^{*2}において、医療データのシステム化、簡易な医療機器ドローンからAI^{*3}まで、さまざまな事業モデルの発表を聞きましたが共通点がありました。それは、発表する起業家のすべてが社会的課題を解決したいという決意で事業展開に挑んでいることです。もちろん起業家ですから事業の算盤^{さんばん}勘定がきちんと合うことを無視していません。しかし、メイク・マナー^{メイク・マナー}だけではなく、メイク・ソサエティも同時に進める彼らの姿に感銘を受けました。

「企業は慈善活動じゃないんだ」——このような声は、いろいろなところからいまだに聞こえてきます。「慈善活動」の定義とは「社会的連帯感や倫理的義務感に基づいて、罹災者^{りさいしゃ}・病人・貧民の救済などのために行われる社会事業」（『大辞泉』）です。

しかし、企業だから「社会的連帯感や倫理的義務感」を排除すべきでは決してありません。また、企業の存在意義とは、弱者の「救

済」にとどまらない「自立」を促すことだと思っています。

企業の存在意義とは「利益の最大化」と、ノーベル賞を受賞した経済学者であるミルトン・フリードマンが主張しました。しかし、それは20世紀の思想です。これからの21世紀に必要な思想は、「価値の最大化」。そう思います。

そして、企業が社会に提供する「価値」とは株主の価値だけではなく、経営者、従業員、顧客、取引先、そして社会などさまざまなステークホルダーへ豊かさを還元すること。21世紀の文脈で企業の存在意義とはステークホルダーにとつての価値の最大化です。さて、金融（資金の融通）＝ファイナンスとは何か。それは、ファイナンスする側が融資先・出資先・投資先のあり方を判断すること。つまりVOICE、声を上げることです。「ステークホルダー価値の最大化」を掲げている存在へのファイナンスは、「それは大事だ」というVOICEを返しています。

かつて日本が途上国から近代社会へと発展した時代に、洪沢栄^{あき}という人物がいました。私の高祖父であり、今年の大河ドラマで彼の生き方が描かれています。100年以上前になりますが、栄一は唱えました。

「その人、その国の生存上最も必要なるは実業である。この実業の力を強くするのが、すなわち国の富を強くする所以である」と。アフリカに洪沢栄一の足跡はありません。ただ、今の時代に洪沢栄一がいいたら、数々のアフリカ事業の創始にVOICEを上げていたに違いはないでしょう。

なぜなら、国の富を強くするのは実業であるから。国と国の友好関係は地理的な、文化的な、意識的な障壁を超え、次世代への遺産になるから。そして、笑顔は大事であるから。

*1 新規事業の育成や企業を支えながら育てる拠点のこと。
*2 創業して間もない企業。新しいビジネスを起こして、市場を開拓しようとする段階を表す。
*3 短い時間で自社の製品やサービス、将来性をアピールする催し。

洪澤 健(しぶさわ・けん)
シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役、commons投信株式会社取締役会長。複数の外資系金融機関およびヘッジファンドでマーケット業務に携わり、2001年にシブサワ・アンド・カンパニーを創業。07年にcommons株式会社(現commons投信)を創業。経済同友会幹事およびアフリカ開発支援開発PT副委員長、UNDP(国連開発計画)SDG Impact Steering Group委員、東京大学基金アドバイザー、等。著書に『洪沢栄一100の訓言』、『SDGs投資』ほか。

イラスト●中村知史